

【 喜多川柯理墓碧銘 】

喜多川柯理（からまる）、本姓（生家の苗字）丸山、蔦屋重三郎 と称する。
父は重助、母は広瀬氏。寛延 3 年（1750 年 2 月）庚午 1 月 7 日 吉原の里に生まれる。
幼くして喜多川氏の養子となる。その人となりは志、人格、才知が殊に優れ、小さな事を気にもせず、人には信頼をもって接した。吉原大門の外に一軒の書店を開き、後に通油町に移転、父母を迎えて厚く養ったが、その父母も相次いで亡くなった。柯理は廓（吉原）の産業を盛んにし人々を豊かにすること、当に陶朱公（古代中国の大商人）の様であった。その巧思妙算（思想力や人を結びつける力と世事物事を見通す計算高さ）は他の及ぶところなく頭抜けていて、ついに耕書堂という大店を成すこととなった。丙辰の年(1796 年)の秋に重病を得て 1 カ月後危篤となる。寛政丁巳の年の夏、5 月 6 日にこう言った「私は今日の昼時には死ぬよ」身の回りの始末をし妻と別れの言葉を交わし、昼時になり笑ってまた言った「自分の人生は終わったはずなんだが（芝居の終演に鳴らす）拍子木がならない。ずいぶん遅いな」言い終わった後はもう言葉を発することなく夕刻になって亡くなった。(1797 年 5 月) 齢 47 歳。山谷の正法精舎（当山正法寺）に葬られた。自分は十里を離れたところに居てこの訃報を聞き畏れの心と共に心底驚いた。まさに悲痛の極みである。まあでも私はただ齊壤間の一罪人に過ぎない、ちっぽけな余生を君と知り合うことのできた恩遇と共に過ごすことにしよう、今はこんな気持ちである。ああ命の儚さよ。

銘曰 人間常行 載在碑史 通邑大都 孰不知子 （人生の歩みを墓碑銘に記載しておくのは、都会の生活の中でいずれ子孫が知らなくなるからだ。）
石川雅望 大田南畝

【 実母顕彰の碑文 】

広瀬氏は本屋耕書堂（蔦屋重三郎）の母、諱（いみな）は津与、江戸の人である。尾陽の人丸山氏に嫁ぎ柯理（からまる、蔦屋重三郎）を生みのち離縁する。柯理は幼くして喜多川氏の養子となり蔦屋重三郎と称する。その住まいは吉原大門のそばにあった。天明 3 年(1783 年)9 月に城東の通油町に居を移し書店を開く。商売を競って優れた本を次々に出版し大いに繁盛、江戸の言い伝えでは皆その店を耕書堂と呼んだという。寛政 4 年(1792 年)10 月 26 日、広瀬氏病死し城北の山谷正法寺に葬られた。癸丑の年(1793 年)2 月、柯理が来て言うには「私は 7 歳で母と別れさびしい思いをしたが後に再会することができて今日の自分がある。願わくば片言の言葉を墓に捧げてその苦勞に報いてやりたい。」私はこう言った「あなたは（寛政の改革による弾圧で）破産し獄中にあった、なのにそんな逆境を乗り越え起業を成した。そんな人物が他にいるだろうか。子のすべき行いとは、母の遺した教えを変えることなく大切に努力することである（だから蔦屋重三郎は成功したのだろう）」

銘曰 小説九百 母徳可摘（愚者の小説より母の遺徳を参考にすべし）
寛政癸丑暮春 南畝 子題